

審査員の講評

【竹下 千晴 先生】

2日間の皆様の心温まる演奏に、しばしコロナも忘れて癒され楽しませて頂きました。途中、10年参加者の表彰では、ここに至るまでの苦労や努力を想像し胸がいっぱいになりました。

世の中が刻々と変化していく中で、私達は音楽を通して何と200年～300年前に生まれた作品に触れ、学び、そこから大いなる恩恵を受けているのです！数百年経ってもその本質は変わらず輝き続け、求めさえすればどこまでも深く私達の探究心を満たしてくれる。何と有難く幸せな事でしょう。

どうかこれからも作曲家が作品に込めた熱い想いに少しでも近づきたい！と願い、更なる努力を続けて下さい。皆様のご成長を心より応援しています。

最後になりましたが、教室の生徒さん一人一人の成長に合わせ、如何にモチベーション高く、楽しく学んでいただくか・・・日々模索し研修されている先生方と社長さんに心より敬意を表すると共に、この様な温かい素敵な時間を共有する機会を頂き本当にありがとうございました。深く御礼申し上げます。

【眞鍋 協子 先生】

2日間にわたり、生徒さんたちの熱のこもった演奏を聴かせていただきました。ご本人とご指導なさった先生方、サポートなさったご家族の皆様に心より拍手を送ります。

私の感じたことを書いてみます。まず、何を伝えたいのか、どんなふうに弾いたらそれが伝わるのか、をまず考えてほしいです。次に、ほかの人はどんなふうに弾いているのか、ほかの人の演奏は自分とは何が違うのか、他者の演奏を意識を持って聴くことも、とても大切な勉強です。

そして強く感じたことは、今の年齢やレベルに合ったレパートリー(曲)を勉強することが、成長を強く促す、ということです。その点、このコンクールは基礎固めとなる課題曲をベースとして、各々の可能性を伸ばすための自由曲も演奏できる、大変意義のある教育の場だと感じました。可能性を秘めたみなさん、たくさんのことを吸収して、それをピアノの歌へとつなげていってください。夢と希望を感じた2日間でした。

【 吉岡 菜月 先生 】

皆さん、素敵な演奏を有難うございました。

まずこのコンクールの素晴らしいところは、幼児から高校生まで2曲、しかも、バロックやエチュードといった基礎曲が必ず入っている事だと思います。そしてほとんどの方が、曲の最後まで弾かせてもらえるので、演奏者が曲に対する達成感をしっかり感じてもらえると思います。

2日に渡ったコンクールを振り返って、強く印象に残ったのは1、2年の部のレベルが高かったということです。まだ指が不安定なこの年齢で、しっかりとしたテンポやリズムの維持が出来ていた方が多く、びっくりしました。一方、指に安定感が出てくる年齢になると、指の動きに任せた演奏だったり、強弱の幅が表現の幅だったり、奥行きが少ない演奏が目立ちました。

審査という立場で聞かせていただいても、聞き手は奏でられる音楽に無意識に共感しようとしてしまいます。その共感が得られにくかった演奏は、たとえノーミスであっても点数的に低くついているかもしれません。年齢が上がれば上がるほど、どうしたら共感してもらえるのかを、聞き手の立場になって考えて、そのためにどんな方法(アーティキュレーション、フレージング、音色、揺らし、効果的なペダリング etc.)があるのか楽しく実験していただきたいです。

私の経験上どんな本番の後でも、本番前より手が動きやすくなっています。本番の一回の演奏は、その特殊な場面での集中力により、頭脳、肉体、精神の面でパワーが瞬発的に育ちます。沢山の曲に触れる事、それを本番で弾く事がみなさんの気づかないところで大きな力になっていますので、これからも新たな曲に向かって頑張ってください。